

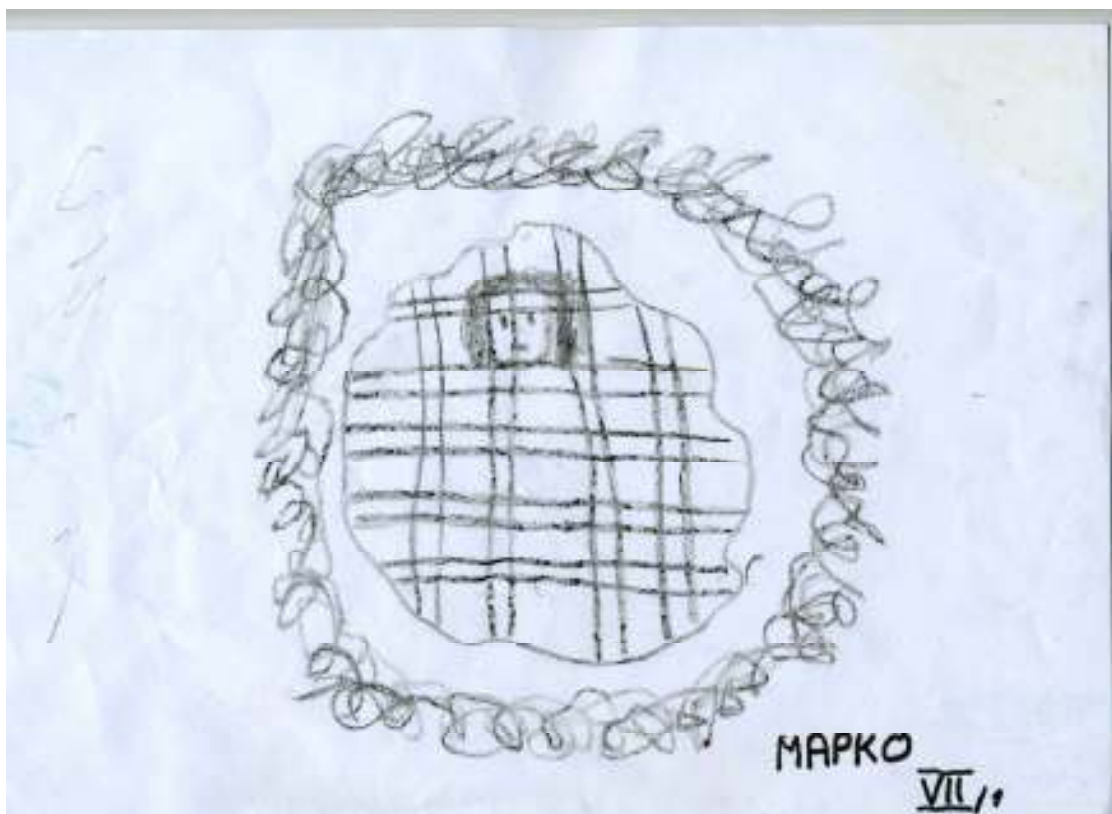


手をつなごう、子どもたちのころと

ACC News Letter

危機の子どもたち・希望

November 2008



ACC ニュースレター第20号 目次

ACC News Letter Vol. 20

- ・ クリスマス・ヴィレッジワークショップ 報告&感想
- ・ コソボ再訪
- ・ ボディショップ助成金
- ・ その他



クリスマス・ヴィレッジ ワークショップ報告

2008年10月4日(土) 都内の児童養護施設クリスマス・ヴィレッジにおいて、主に小学生低学年～中学年を対象にワークショップを行いました。初めに、オリジナルの紙芝居を用い、コソボで実際に起きた話を交えながら「戦争と平和」について一緒に考えました。「戦争が起きたらどうなってしまうと思う？」というACCメンバーの問いに対して、子どもたちは真剣なまなざしで「学校に行けなくなる」「食べるものがなくなる」などと答えてくれました。そして、今も尚紛争での傷を負い暮らしているコソボの子どもたちへ、彼らが元気になれるような絵と一緒に描いてほしいとの私たちの呼びかけに、子どもたち全員が「いいよー！」と元気に返事してくれました。今回は、2m四方の大きな布にペンキと刷毛を使って自由に絵を描いてもらうワークショップを行いました。真っ白の布にいきなり絵を描くことに抵抗があるかもしれないとの私たちの予感、あっさりと覆さ

れました。子どもたちは、我先にと刷毛を持ち絵を描き始めました。にこちゃんマークを描き、「これでコソボの子笑ってくれるかな？」と聞く子。「お花何色がいいかな？」と友達と相談しあう子。皆思い思いの絵を、本当に楽しそうに描いていました。しまいには、自分の手足にペンキを塗っては布の上を走り回り、せっかく描いた絵が見えなくなってしまう程でした。出来上がった作品は、美術的には綺麗なものではなかったかもしれませんが、子どもたちの溢れんばかりのエネルギーとパワーを感じるものでした。ワークショップでは、多くの子どもたちが「楽しい～」と言いながら、素敵な笑顔をみせてくれました。子どもたちのその笑顔を励みに、これからもより良いプログラム作りにメンバー一同力を入れて参りたいと思います。最後に、ご協力下さりましたクリスマス・ヴィレッジの職員の皆様に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

クリスマス・ヴィレッジ 感想文

クリスマス・ヴィレッジという児童養護施設に行ってきました。目的は子どもたちとワークショップをすること。コソボに起こった問題の話をする、というのがありますが、今度のお相手は遊びたい盛りの10歳になるかどうかという子どもたちが多いため、まず第一に、『一緒に遊んで遊ぶ、楽しむ』こと、となります。しかし、コソボ紛争での話をする、とても興味深く話を聞いてくれ、勢いよく自分の意見を声に出す子どもがとても多かったのには驚かされました。そしてその後のワークショップでも予想外のことがあったのです。

私たちのワークショップというものは数多くの形があるのですが、基本は自分の身体、想像力を使って自己表現をするというもの。実は今まではそういった自己表現を恥ずかしがる年頃の中学生を対象としてきたため、ワークショップをノット気分で行うためにできるだけインパクトの強い、大胆な道具を使うことが多いのです。今回もその例に漏れず、用意したものは大量の絵の具。絵を描く時に、マジックや色鉛筆などの繊細なものを使うよりも、こちらのほうが勢いがつき、開放的な

気持ちになって描けるのではないかと考えてのものです。けれどもクリスマス・ヴィレッジの子どもたちにそんな考えは無用でした。いや、絵の具を使用して自由に勢いよく行動してもらおう、と思ったのは間違いではなかったのでしょうか。彼らは実に元気いっぱい動き回り、楽しんだという意味ではこれ以上ないほどの成功でした。しかし勢いがあれば万事OKというわけには当然行きません。なんともはしゃぎすぎてそこら中絵の具だらけにしてしまったのです。私たちが当然予想すべきことだったのですが、まさかここまでやるとは思いませんでした。床にも壁にも絵の具。絵の具のついた足で歩き回り、カラフルな足跡を残してゆく子。なかには絵の上でスライディングして全身染まった子まで…でも先にも言いましたように、楽しんでもらうという意味ならばこれは大成功だったのです。

施設の方には少しとは言い難い迷惑をおかけしてしまいましたが、次はこの興奮を保ったまま、誰の迷惑にもならないような方法を考え、その遊ぶという過程で自分と向き合うということを多少なりとも感じてもらえたら、



そしてその時のように色々な事を思い、感じる同じ人間が遠い海の向こうにも居るのだと感じてもらえたらどれだけいいだろう、と、そんなことを雑巾を手にし、絵の具を拭き取りながら私は思いました。この日の経験はわ

たしにとってとても貴重なものとなっています。おなじく、子どもたちにとっても貴重な時間であつたらいいと、心から思います。

(守山 芳樹)

コソボ再訪

2008年2月17日、独立宣言を出し、現在日本政府を含め46カ国の承認を受け「新しい国家」として歩みだした「コソボ共和国」。この夏の訪問についての報告です。

「コソボ＝頭上を弾が行き交う紛争地」と想像される方も多いと思いますが、コソボの犯罪率は極めて低く、そこに住む多くの人は「日本の繁華街より安全だ」と笑います。それもそうでしょう。独立がなされた今も1日3億円を使ってNATO軍がKosovo Force (KFOR)として駐留していると聞きます。街のそこら中にKFORの車をみかけました。クラクションが鳴り響き交通ルールのままならない道路に、新旧普通乗用車とKFORのカーキのトラックから戦車まで、そして白いUNのジープが入り乱れているのです。多数派のアルバニア系と少数派のセルビア系が橋を隔てて住むコソボ第二の都市ミトロヴィツァでは、機関銃をぶら下げたフランス兵をそこら中で見かけます。象徴的なその橋の両端に立っているのも難しい顔をしたKFORの軍人です。世界遺産の教会には24時間2人のスウェーデン軍が立っています。ここでいたずらや犯罪をするのはなかなか難しいでしょう。もちろん、未だにコソボの地が麻薬や人身売買、国際逃亡のルートとして問題になっているのも確かです。しかしながらその地では、普通の人々が軍隊と一緒に「平和に」暮らしているように見えました。

「平和そうに見えるだろう。だから国連は両民族で手を取って平和に暮らせて言うんだ。でも一線を越えたらどうなるかわかるだろ。火山のように、地震のようにいつ爆発するかわからないんだよ。」首都プリシュティナ近くのセルビア人エンクレーブ（他民族に囲まれた地域）リピアン村の小学校で校長先生をする彼は言いました。

独立前の2004年3月、国連職員を含めて死者19名、負傷者約1000名を出す大きな暴動がおきました。国連の統治下にありながら、KFORも駐留しながらです。その際ほとんどのセルビア系住民が一時難民化しました。私た

ちは、ちょうどこの時セルビアにいたのです。これは・・・コソボに住むセルビア系エンクレーブの子どもたちをセルビア本土に招き、2泊3日の「虹の学校」で島根県の子どもたちとの自画像交換を終え、笑顔で彼らに「ヴィディモセ（またね）」を言ったちょうど3日後のことでした。この時の死者には、セルビア系住民よりも暴動の混乱によるアルバニア系住民や国連職員が多く含まれていました。しかし、彼らが危険を感じて避難している間に、たくさんの彼らの家、そして教会は壊され、また燃やされました。それは「もう帰ってくるな」ということを意味しているのでしょうか。暴動は鎮圧され、難民の帰還や家や教会の修復が進み「元の生活」に戻りつつあった2年前、私たちが「虹の学校」で会った彼らを訪ねてコソボに行ったとき、彼らは日本の子どもたちの描いた大きな大きな元気いっばいの太陽の上で、静かにしかし楽しそうに「燃えている家」や「泣いている人」「格子の中にいる自分」を描きました。それから更に2年が経った今でも、彼らは昨日のこつのように覚えているのです。あの時の出来事を。校長先生は続けます。「あの時、ちょうど妻が身重だったんだ。僕らは村の学校の二階に逃げた。2時間待ったけどKFORはこなかったよ。もう危ないって時に、窓から飛び降りたんだ。彼女が無事で本当によかった。」彼は無表情でそう言った後、優しそうな目をして4歳くらいの息子を抱き寄せました。彼いわく、セルビア系の村のナンバーをつけて車を走らせていた時、わざと正面衝突されそうになったことが2度あるといいます。「一人だったらそれでも俺は行く。ぶつかれるものならぶつかってみろ。怖いからって俺は家でじっとしていたくないんだ。俺はかごの中の鳥じゃない。」そう荒々しく言ったあと、静かにため息をついてこう言いました。「でも家族が一緒だと、怖くて外にでられないよ。」

今回の旅で、私はアルバニア系の人々にも多く接しました。友達もできました。人懐っこくて愉快で、いい人たちでした。この現実



と、敵対する人々の両方に触れて、私は複雑な想いでいっぱいでした。「誰が良い、誰が間違っている」ではなく、こういう現実があるということ、こういう現実の中でもそこに

いる人々は自分の毎日と、人生と向かい合っ
て生きているんだということを感じた 2
週間でした。 (竹内 めい)

ボディショップ助成金

この度、ACC はボディショップ様（株式会社イオンフォレスト）より、「おばあさんの手」に対して 30 万円の助成金を頂きました。このように、私どもの小さな活動に賛同、応援して頂けることは、資金面で非常に支えられることはもちろん、大きな励みと自信になり、プログラムのさらなる充実と発展に新たな責任を感じる機会でもあります。



9 月 17 日、2008 年度助成金贈呈式が行われ、代表の松永と共に出席致しました。株式会社イオンフォレスト代表取締役の岩田様が

ご挨拶の中で、「みなさんとは、今日の贈呈式をきっかけに、今後一緒に活動していく仲間になったと思っています」とおっしゃっていたのがとても印象的で、心強く感じました。助成対象となった各団体よりプレゼンテーションがあり、「おばあさんの手」について、写真や実物をお見せしながら発表しました。他団体の発表もとても興味深く、感心させられるものばかりで、活動内容は異なっても、「社会の役に立ちたい、社会を変えたい」、という共通の想いを胸に、日々奮闘している姿を身近に感じることができました。贈呈式後の懇談会では、社員の方々、各団体の方々とお話し、様々な情報交換を含め、非常に充実した時間を過ごすことができました。

贈呈式のレポートがボディショップ様の HP に掲載されておりますので、他団体の活動も含めぜひご覧ください。

ボディショップの皆様、この度は本当にありがとうございました。温かいサポートに心から感謝致します。 (久米澤 咲季)

婦人三田会バザー参加

9 月 12 日慶應義塾三田校舎で開催された婦人三田会のバザーに、今年も ACC が参加致しました。「おばあさんの手」の作品を中心に、一昨年度の「人々と戦争」で紹介したマルク・シュナイダー氏の写真パネルも展示しました。売上金の一部は、慶應義塾大学に学ぶアジアの留学生の奨学金にも活用されます。

○郵便振替

口座番号 180-0-69004

口座名 特定非営利活動法人

危機の子どもたち・希望

(編集後記)

ニュースレター 20 号をお読みくださりありがとうございました。皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。

(編集担当：内田 英子)

ご協力をお待ち申し上げます

個人会員	年会費	10,000 円
学生会員	年会費	2,000 円
子ども会員	年会費	1,000 円
法人会員	年会費	30,000 円

送り先

- 三菱東京 UFJ 銀行 恵比寿支店
普通預金口座 1610158
口座名 特定非営利活動法人
危機の子どもたち・希望

特定非営利活動法人
ACC 危機の子どもたち・希望
〒150-0021
東京都渋谷区恵比寿西 2-16-15-102
TEL/Fax 03-3496-7090
E-mail forhope@tkk.att.ne.jp